

『東方』三〇七号より

漢（唐）皇帝祭祀研究に 確固とした基礎を与えた研究

山田勝芳（東北大学）

中国の皇帝制度は二千年以上継続した支配制度であり、中国国家の根幹をなしていた。それは、「皇帝」という称号を有する君主の下、中央・地方における官僚制・官署機構、軍事機構、及び支配のソフトとしての諸法規・行政ノウハウ等が整備され、戸籍制度を根幹とする民の支配と税役・財政システムによる全国的財物の運営が物質的支えであった。これら諸制度については膨大な研究が歴代について蓄積されてきている。しかし、皇帝そのものについては、どこでどのようにして即位し、官僚や民に即位を知らしめたか、そして中国世界の君主としての正統性をどのような形で示していたか等々については、事柄が儀礼にわたり、その解明のためには歴代の膨大で煩瑣な「礼論」研究を不可欠とするために、ほとんど手がつけられていなかったのである。一九七〇年代後半以降この課題に敢然として挑み、見事な成果をあげたのが著者の金子修一氏である。ともすれば開拓者の労苦はなかなか理解されないものであるが、金子氏がいかに多大な労力をかけて史料を読み込み、論点を整理し、儀礼・祭祀等の変遷解明を果たそうとしたかは、本書と関連著書等を通読することでよく理解できよう。

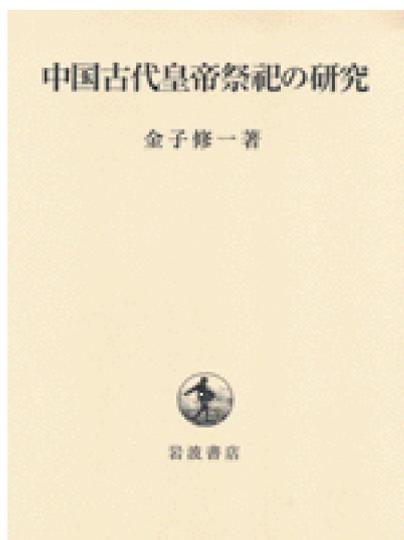
まず本書成立にいたるまでを振り返ってみよう。金子氏は、一九七八年の論文「中国古代における皇帝祭祀の一考察」（『史学雑誌』八七巻二号）で、この課題に対する研究

[トップページにもどる](#)

金子修一著

『中国古代皇帝祭祀の研究』

A5判・六二四頁・岩波書店・一三、六五〇円



手法・分析視角・論点を提示し、当時、学会に新鮮な驚きをもたらした。本書にこれは収録されていないが、この論文の諸論点・解明点が以後の研究でさらに修正・深化・拡大されたことによる。これは初発の論文で本書に至る壮大な研究課題への一定の回答と研究方法が得られていたことを示すもので、研究者としてむしろ慶賀すべきことである。金子氏は、その後着実に皇帝儀礼・祭祀研究を進め、やや一般向けに書いた論文等をまとめた『古代中国と皇帝祭祀』（汲古書院、汲古選書、二〇〇一年一月。以下「前著」とする）を上梓した。これは、著者の論文については追加した部分があるが、他の研究者の研究論文については新たな補入はしない形でまとめられたもので、二〇〇〇年段階のまとめとなっており、金子氏の研究のエッセンスでもある。この前著の基礎となった諸論文については別な形でまとめることとし、それを果たしたのが浩瀚な本書なのである。

しかも単なる既発表論文の集成ではなく、二〇〇五年段階の關係研究を網羅し、前著への追加を行った研究書であり、結局、著者の研究のエッセンスの根拠を尋ね、最新の見解を見ようとするならば、本書を繙いて関連箇所を熟読する必要があるのである。

本書の紹介に入りたい。序章、第Ⅰ部第一章～第三章、第Ⅱ部第四章～第八章、終章からなり、引用史料に丁寧な読み下しをつけ、またルビも多用して読みやすい工夫がこらされ、また研究結果を示す内容ともなっている全二二表が付されている。研究史がないのは、著者の研究の歩みそのものが研究史だからである。各章にはいずれも「小結」があつて各章のまとめがなされ、しかも終章では各章をさらにまとめ、その上で皇帝祭祀の意義と役割を総括的に論じている。したがって、各章ごとの内容を要約するのは、著者による丁寧なまとめ以下になりにかねないし、また紙幅に制約があるので、最低限の紹介だけにすることをお許し願いたい。

序章「皇帝支配と皇帝祭祀——唐代の大祀・中祀・小祀を手がかりに」において、唐代の皇帝祭祀が大祀・中祀・小祀より成り立ち、有司撰事が行われていたことを議論の開始に置き、第Ⅰ部「郊祀・宗廟制度の成立とその展開」では、まず第一章「魏晉南北朝における郊祀・宗廟の制度」において、宗廟は、後漢の大祭の禘祫と小祭の四時祭とが各王朝に継承され、郊祀については、南朝がやや王肅説に近く、北朝が鄭玄説に近いこと、皇帝祭祀の歴史の中で、東晉は一つの画期として注目されること等が解明された。第二章「唐代における郊祀・宗廟の制度」で、貞観礼が鄭玄説に依拠し、頤慶礼は王肅説に依拠し、開元礼は貞観礼・頤慶礼を折衷し、かつ昊天上帝の祭祀は頤慶礼を継承

▶ トップページにもどる

したこと、昊天上帝の祭祀に季秋九月の明堂の祭祀と雨乞いの大雩の祭祀も登場してきたこと、郊祀・宗廟の祭祀には皇帝親祭と有司撰事との区別があつたこと等を述べ、第三章「唐代皇帝祭祀の親祭と有司撰事」で、その具体的な内容を究明する。唐初から皇帝親祭が決して多くはなく、多大な費用を要する特別な祭典であつたし、冬至の郊祀は通常有司撰事で行われたこと、親祭は参列者が多く準備も入念で費用も多額に上つたこと、有司撰事の形骸化が進行していたことを明らかにした。

第Ⅱ部「郊祀・宗廟制度の運用とその意義」では、冒頭の第四章「漢代における郊祀・宗廟制度の形成とその運用」で、皇帝祭祀の原型が形成された漢代の考察を行い、郊祀の前身の祭祀では武帝代まで不老不死祈求の呪術的な祭祀であり、元帝・成帝頃から儒教的祭祀が導入され、郊祀制度の基本は平帝期に王莽によって定められ、「元始中の故事」として後漢にも継承されたこと及び皇帝祭祀成立史上における王莽の役割の大きさを指摘し、皇帝祭祀における「皇帝臣某」「天子臣某」の自称とその使い分けの論理とは光武帝死後の明帝朝で形成されたこと、後漢末献帝朝の混乱期には郊祀や宗廟の親祭が明らかに自覚的に行われるようになったこと等を明らかにした。第五章「魏晉南北朝における郊祀・宗廟の運用」でその後の展開を述べ、特に転換点としての東晉の重要性を指摘し、隔年ごとの正月に南北郊を祀る二年一郊の制度が確立し、皇帝が即位の翌年から実施すること、南郊祀の際に大赦を行うことも定例化したと述べる。一方北朝の北魏では、中国伝統の郊祀とは別に前半では「北族伝統」の西郊の祭天も行われ、祭祀の種類や性格によって皇帝親祭と有司撰事とが使い分けられ、皇帝親祭は少数に止まったとする(第六章「北朝における郊

祀・宗廟の運用)。それらを承けた唐では、宗廟の正祭である禘祫・時祭の親祭がほとんど皆無で、則天武后の時から郊廟の親祭に大赦改元が随伴し始め、玄宗天宝年間以降、太清宫―太廟―南郊の一連の祭祀が確立し、さらに即位翌年正月の一連の親祭が定例化し、大赦・改元も随伴したが、皇帝祭祀を長安市民の居住区に引き出すというような皇帝祭祀の世俗化が進んだ(第七章「唐代における郊祀・宗廟の運用」)。さらに第八章「中国古代の即位儀礼と郊祀・宗廟」・附論「唐朝帝室の謁廟について―皇帝・皇太子・皇后」において、西嶋定生氏の漢代の即位儀礼「天子即位―皇帝即位」説に対して、著者は改めて即位儀礼は皇帝即位のみであり、第一段階と第二段階があるとし、唐代の即位儀礼では基本的には冊と詔とが重要であった等の指摘をする。そして終章「郊祀・宗廟及び即位儀礼より見た中国古代皇帝制度の特質」で、帝位の継承が制度的に保証されなければ臣下の承認を得ることが難しくなった、等の興味深い指摘を行っている。

これらの研究成果は、間違いなく世界的にも最高水準にあると思われる。論証は堅実であり、誤植等もごくわずしか見られない。そこで、以下若干の感想めいたものを陳ねることで書評の責めを果したい。まず、史料解読面では、(一)前漢文帝の即位事情(四三八頁以降)を『史記』巻九呂太后本紀、巻一〇孝文本紀等で見ると、「天子」は「皇帝」と同義に使われ、かつ少帝を未央宮から少府に追い出して、代王が未央宮に入って天子＝皇帝となり、詔書を「皇帝」号で下したとみられるので、皇帝の継承は印璽が重要であり、即位は未央宮で行われたこと、天子即位はなかったと考えられること、(二)『後漢書』(『統漢書』)礼儀志中の「請雨」の「其旱也、公卿官長以次行雩礼求雨」(八六頁)

▶ トップページにもどる

について、「雩祀は漢代では地方の郡県の行う祭祀」としているが、「公卿」とあること、劉昭注引用『漢旧儀』に「求雨、太常禱天地・宗廟・社稷・山川以賽、各如其常牢、礼也。」とあるように、前漢以来太常は雩祀に関わっており、なんらかの皇帝の関与も考えられないか、という二つの疑問点だけをあげておく。

次に、著者は禁欲的な論証と叙述を進めているが、以下の点についての研究がより豊かな研究を今後開拓することになるのではないかと考える。まず、祭祀を担当する漢代の太常以下の官署・官僚による歴代の祭祀システム及び財政的観点からの祭祀のあり方についてはあまり言及されていないので、この面から新たな展開がありうるのではないかと。さらに大きい問題は、「中国古代」という時代区分に因んで、西嶋定生氏・尾形勇氏は日本古代との関連も考えながら秦漢代に形成され始めた古代国家が唐代で完成をみるという観点に立って、「古代」皇帝制度の特質としての印璽・儀礼・「称臣」の研究を進め、著者も基本的にその枠組みに立脚していると認められるが、この国家論・時代区分論そのものである。殷に典型的な祖先祭祀以降、王朝や諸侯から民衆まで、祖霊や天地以下の神々への求加護・求福・求除禍の精神構造は変わりなく続いてきたとみられ(もちろんこの時代相応の「人間化」「世俗化」が進んだが)、これこそが「古代」のあり方だとすれば、前漢の皇帝祭祀の解釈についても別な観点を提示しようと思われる。また、儒教的制度が後漢代に原型がほぼ形作られるが、「古代」＝唐末までという枠の中で唐代から遡及した研究なので、結局、既に完成したステータックな儒教的祭祀儀礼の観点から前漢の祭祀をも見えてしまっているのではないかと感ずる。さらにいえば、儀礼はともかくとして、祭祀を問題

▼ 『東方』 307号より

四 漢～唐皇帝祭祀研究に確固とした基礎を与えた研究

▲ 山田 勝芳

にする以上、中国の宗教（キリスト教的・一神教をベースとした「宗教」概念ではなく、より広い概念が必要）の中の殷周から隋唐までの皇帝祭祀の展開について、もう少し別な要素も入れた説明の仕方もありうるかもしれない。ただ、これらはいずれも著者の目指したものは異なる研究視点なので、門外漢の的外れな感想としてお許し願いたい。他にもいくつか考えさせられた点があるが省略する。

以上、金子修一氏の優れた研究について蕪辞を連ねたが、「当該分野において、世界的水準の確固とした基礎的研究である」ことを改めて確認して、この書評を終えたい。

[トップページにもどる](#)